

喪主挨拶

皆様、本日はお忙しいなか、浦山久嗣のためにご参集たまわり、誠に有難う存じました。

また、ここでまず申し上げておきたいのですが、この会の運営にあたりまして、経絡治療学会東北支部・宮城県鍼灸師会・仙台赤門短期大学の方々にご尽力たまわりました。ここに衷心より御礼申し上げます。

浦山久嗣は、3月26日22時47分にこの世を去りました。実際に脈拍と呼吸が止まったのは40分でした。21時25分にモルヒネ投与を始めてから、1時間と少しでございました。

死因は「多臓器不全」、心不全と腎不全ですが、直接的な原因は「上行大動脈血栓症」ということになっております。2010年に大動脈解離を患い、大動脈の一部を人工に置換したのですが、そのとき手術せず残した腹部大動脈の解離が、今回のきっかけを作ったかに聞いております。大動脈解離を患うまで、この「仙台中央斎場清月記」のある本町2丁目、歩いてすぐそこの19番地に、「移山堂」という治療院を営んでおりました。この斎場の前をとおってかよっておりました。

久嗣のからだは、翌27日10時20分より、病理解剖に供されました。本人は生前、献体して医学生生の教材になることを望んでおりました。ですが、生前白菊会に入っておらず、受付はできないとのことで、主治医の薦めてくださった病理解剖をお願いいたしました。フレッシュな状態で解剖されたほうが、より今回の病因に近づけるのではないかと、教材としては氏名も明かされないまま解剖されて終わりだが、病理解剖では記録が残り、報告書が遺族に届けられるということで、このまま茶毘にふされるよりはよいと考えたのです。2時間もあればお返ししますし、と、いうことでした。

13時15分ごろ、からだは一度病棟に戻りまして、主治医により、肉眼解剖による結果を簡単に聞きました。16年前に残した腹部の解離から炎症が起こり、それが組織を硬化させながら上へ向い、人工血管に置き換えた部分まで到達し、いつかはわからないが人工血管がおそらく経年劣化で傷がつき、硬化した組織との間に、血液がしみだして血栓を作り、それが徐々に大きくなって上行大動脈を圧迫していったとのことでした。上行大動脈には一滴の血も流れないまでになっていたそうです。2年前から腹膜透析に踏み切ったのですが、その2年前に気づいていたとしても、おそらく開胸してもすぐ閉じたであろうということでした。苦しかったと思います。

さて、遺影に使いましたのは、2016年のWFASでの自分のポスター発表の前での写真です。古典に関する発表かといえば、さにあらず。管鍼法の衛生状態を確保する

ためのフィルムというかシートというかについての提案をしたものです。

浦山久嗣といえば古典研究、特に脈診とツボ、とっておられる方は多いと思うのですが、科学史の教官である私からみれば、「臨床の人」でありました。「古典から伝統医学の体系を再構築しようとし、それを手がけた人」でありました。研究内容が書誌学で終わるわけではなく、文献の意味を探るだけで終わるわけでもありません。あくまで意のあるところは「臨床」だったと思います。私からすれば、腕もそこそこだったと思います。

本人は、鍼灸が大好きでありました。

今朝（偲ぶ会の朝）、写真を整理していて、本人の自筆になる、一枚のメモを見つけました。日付は2011年6月19日。東日本大震災から3ヶ月、本人の大動脈解離から1年足らず、全日本鍼灸学会で話したものと思われます。この日は、「日本鍼灸における東京宣言」が採択された日でもありました。本人の鍼灸に対する考え方を端的に表わしていると考えますので、全文を読み上げますことをご許してください。

今、ここにも、被災地域からいらっしゃった方も、おられると思いますが、壇上で発言するのは私ひとりのようですので、一言、ご挨拶させて頂きたいと思います。

皆さんも、報道ではご存じのことと思いますが、震災から3ヶ月を過ぎまして、実のところ、状況は悪化しています。避難所の周囲は腐敗して、悪臭が漂い、ハエやカが大発生していますし、被災者は疲れはて、何よりも希望を失いかけています。

私は、日本の鍼灸には人々を幸福にする力があると信じる者です。

どうか皆さん、いつの日か、東北に鍼灸ボランティアにいらっしゃって下さい。

私自身は、昨年、患った病気の後遺症のために、ボランティア活動をすることはできませんが、こうして皆さんにお願いすることはできます。

鍼灸という人を幸せにする医療を通して、皆さんお一人、お一人が、今できることをするだけで、それが世界の幸福につながっていると信じています。

どうか宜しく願いいたします。 浦山 2011/6/19

以上です。

本人は鍼灸が大好きでありました。
やりたかったこと、やりかけたことはたくさんあったと思います。
経絡治療を短大に教えること、『難経』についての連載を八十一難までやりとげること、
そして伝統医学の体系の再構築など。そのすべてがかなわなくなりました。

鍼灸が世界の幸福につながるもの、そして
日本の鍼灸が人々を幸福にする力を持ったものと、
信じていた浦山久嗣を、
どこかで、折にふれて思い出していただければ幸甚に存じます。

本日は本当に有難う存じました。

浦山きか